

性別による所得格差の差が家庭におけるライフサイクルの段階によって異なることについて

孫 晨晨、澁谷 遊野、関本 義秀

研究の背景

日本の男女格差問題は、他の先進国に比べてかなり深刻である。また、男女格差は年齢が上がるにつれて大きくなる傾向がある。特に専業主婦の割合が高い日本では、世帯構造が生活空間における男女差に大きな影響を与えている。そこで本研究では、所得水準と世帯構造を組み合わせ、日常的生活空間における所得階層を超えた女性の交流の可能性を探ろうとした。

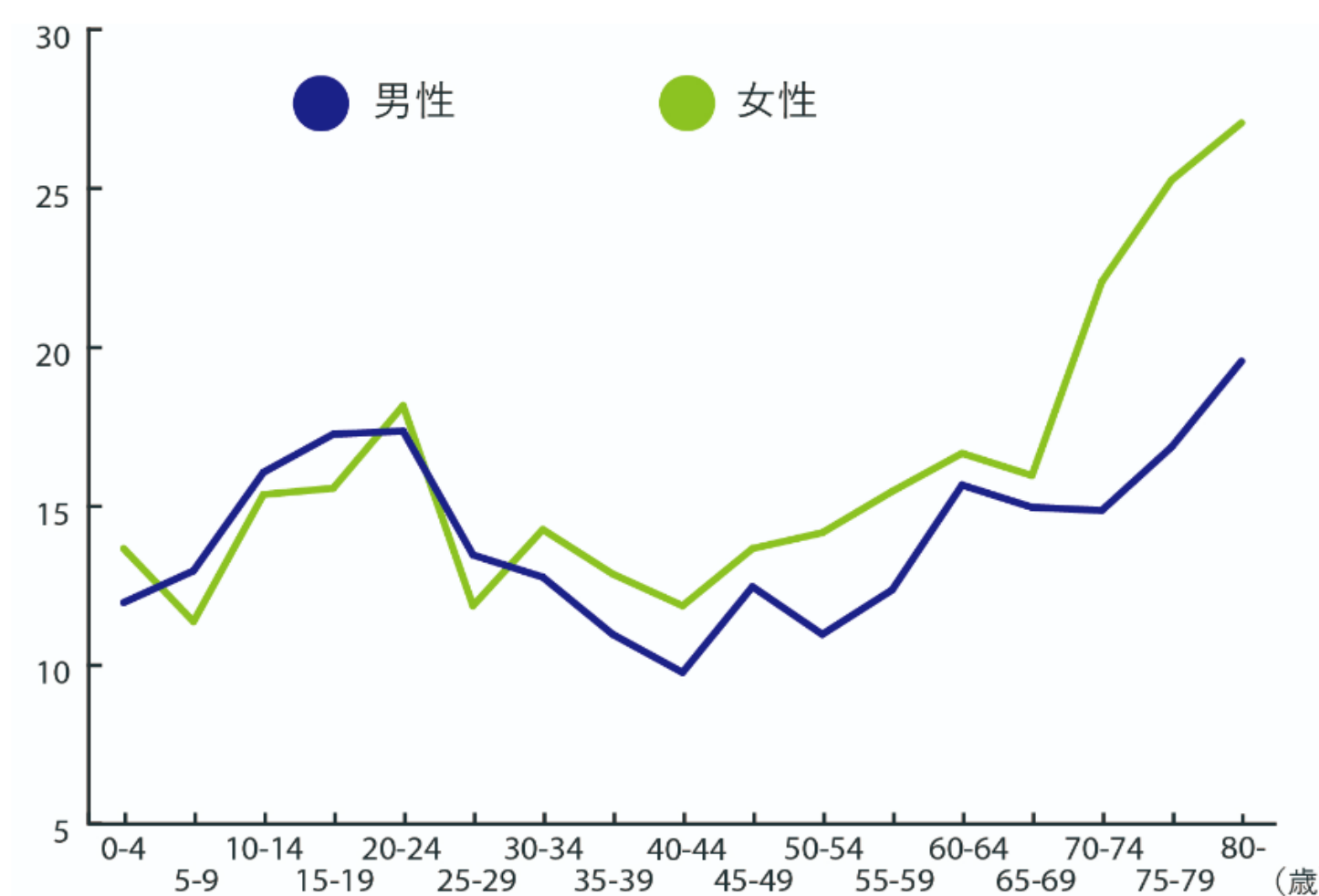


図1 日本の相対貧困率の動態

資料源：阿部彩(2018)「日本の相対貧困率の動態:2012から2015年」貧困統計HP

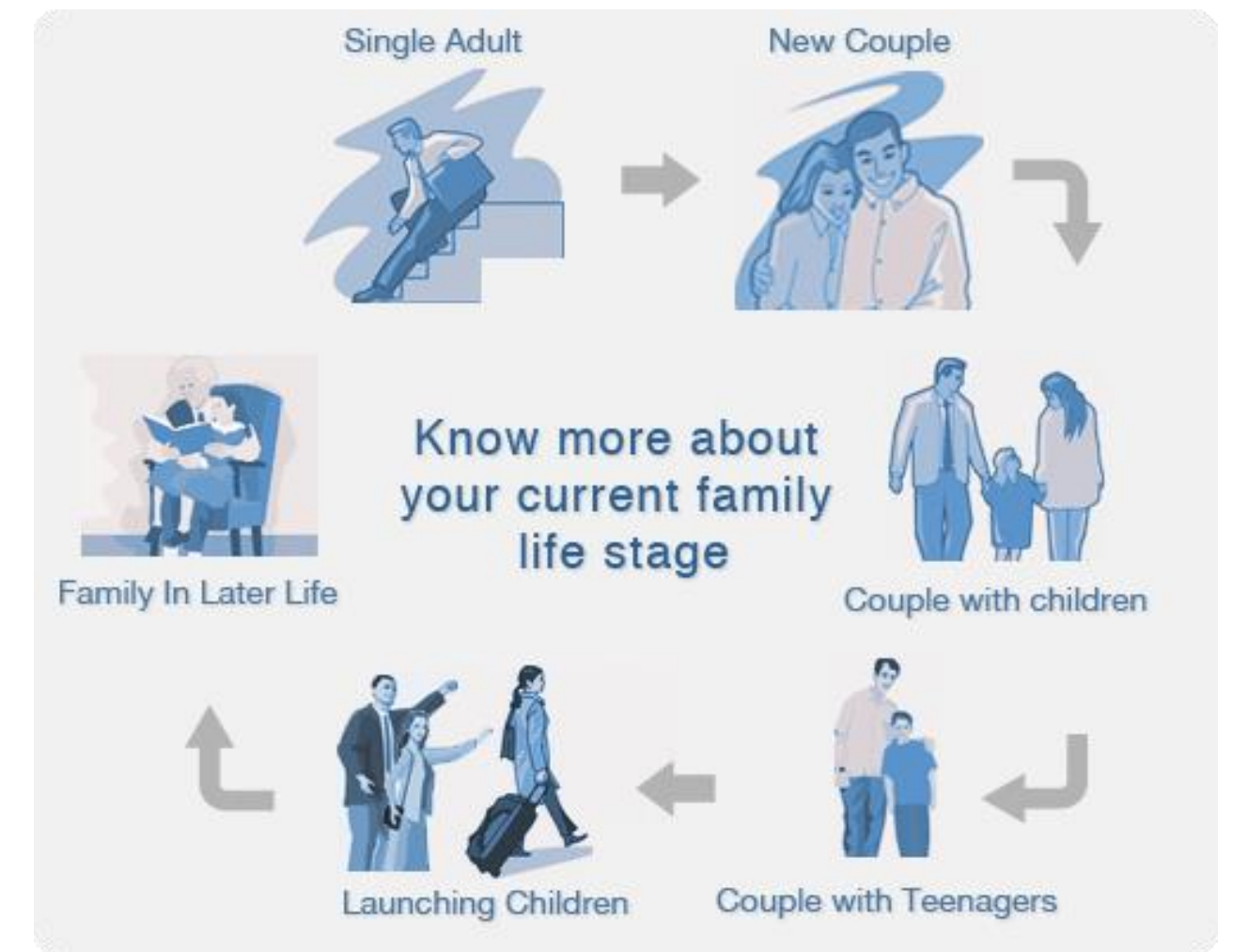


図2 ライフサイクルステージ

資料源：この図はこのウェブサイトからダウンロードしたものである：<https://talkitover.in/>

研究の方法

同じ1km×1kmのグリッド内で居住、通勤、非日常活動（買い物、公園、運動など）をする利用者は、互いに社会的接触があるとみなす。パーソントリップ調査のデータに基づいて、所得に基づく非日常活動空間における収入格差（NRAS）、日常活動空間（職場と住居を含む）における収入格差（RAS）、職場における収入格差（WS）、住居における収入格差（RS）を算出し、利用者が異なる活動段階において所得レベルの異なる人々と接触する可能性を捉える。すべての指標は、[0,1]の範囲にあり、1は非常に分離されていることを示し、0は分離されていないことを示す。

$$RS_i = \frac{5}{8} \sum_g \left| R_{g\alpha} - \frac{1}{5} \right| \quad (1)$$

$$WS_i = \frac{5}{8} \sum_g \left| W_{g\alpha} - \frac{1}{5} \right| \quad (2)$$

$$RAS_i = \frac{5}{8} \sum_g \left| \sum_{\alpha} RA_{i\alpha} RA_{g\alpha} - \frac{1}{5} \right| \quad (3)$$

$$NRAS_i = \frac{5}{8} \sum_g \left| \sum_{\alpha} NRA_{i\alpha} NRA_{g\alpha} - \frac{1}{5} \right| \quad (4)$$

$R_{g\alpha}$: グリッド α に住む所得グループ g の住民の比率;
 $W_{g\alpha}$: グリッド α に住む所得グループ g の労働者の比率;
 $NRA_{g\alpha}$: 所得グループ g の訪問者がグリッド α に滞在する時間の、全所得グループの滞在時間に対する比率;
 $NRA_{i\alpha}$: 個人 i が活動場所 α で過ごした時間の、非日常的活動のための全活動場所での総時間に対する比率。

結果と考察

図3は、ライフサイクルの段階別に、女性グループと男性グループの職場の地理的分布を比較したものである。育児が必要な女性層の分布は、男性に比べて分散している。しかし、このような男女差は、未婚の男女では緩和されている。

図4では、異なるライフサイクル段階における女性と男性の平均的な収入格差を比較している。特に、育児段階では男女差が最も激しい。既婚女性は、子どもの世話や家事に多くの時間を費やすため職場が自宅から近い地域に限定される傾向があり、同じ所得階層や人生

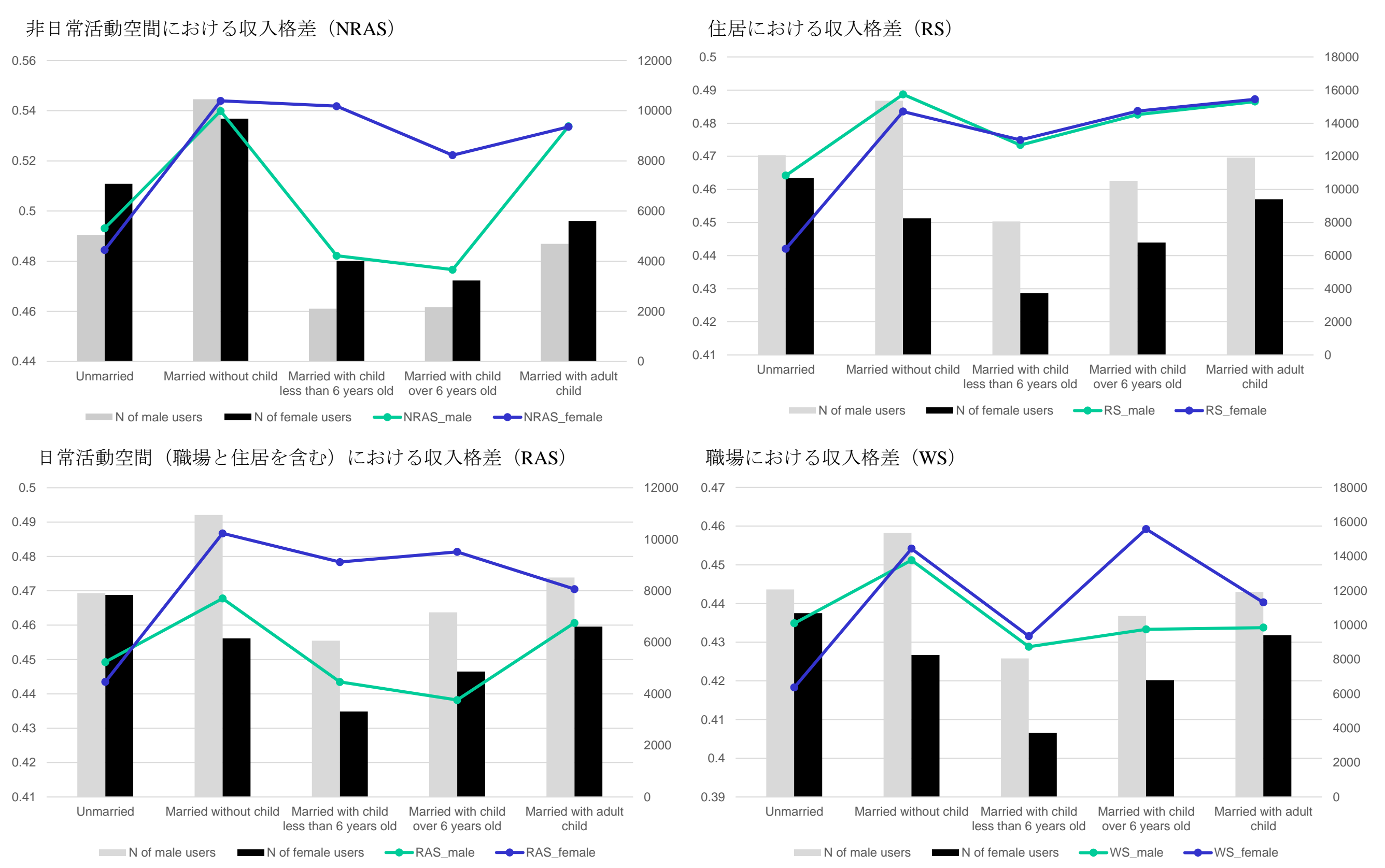


図4 ライフサイクルの各段階における男女グループの収入格差

の同じ段階にある人々と交際する傾向がある。その結果、彼らは男性よりも高い所得分離を経験することになる。

研究の結論

生活空間別分離の男女差は、家族のライフサイクルの段階に大きく影響される。そして、何がこのような男女差を緩和することができるのかという疑問には、さらに研究を続ける必要がある。

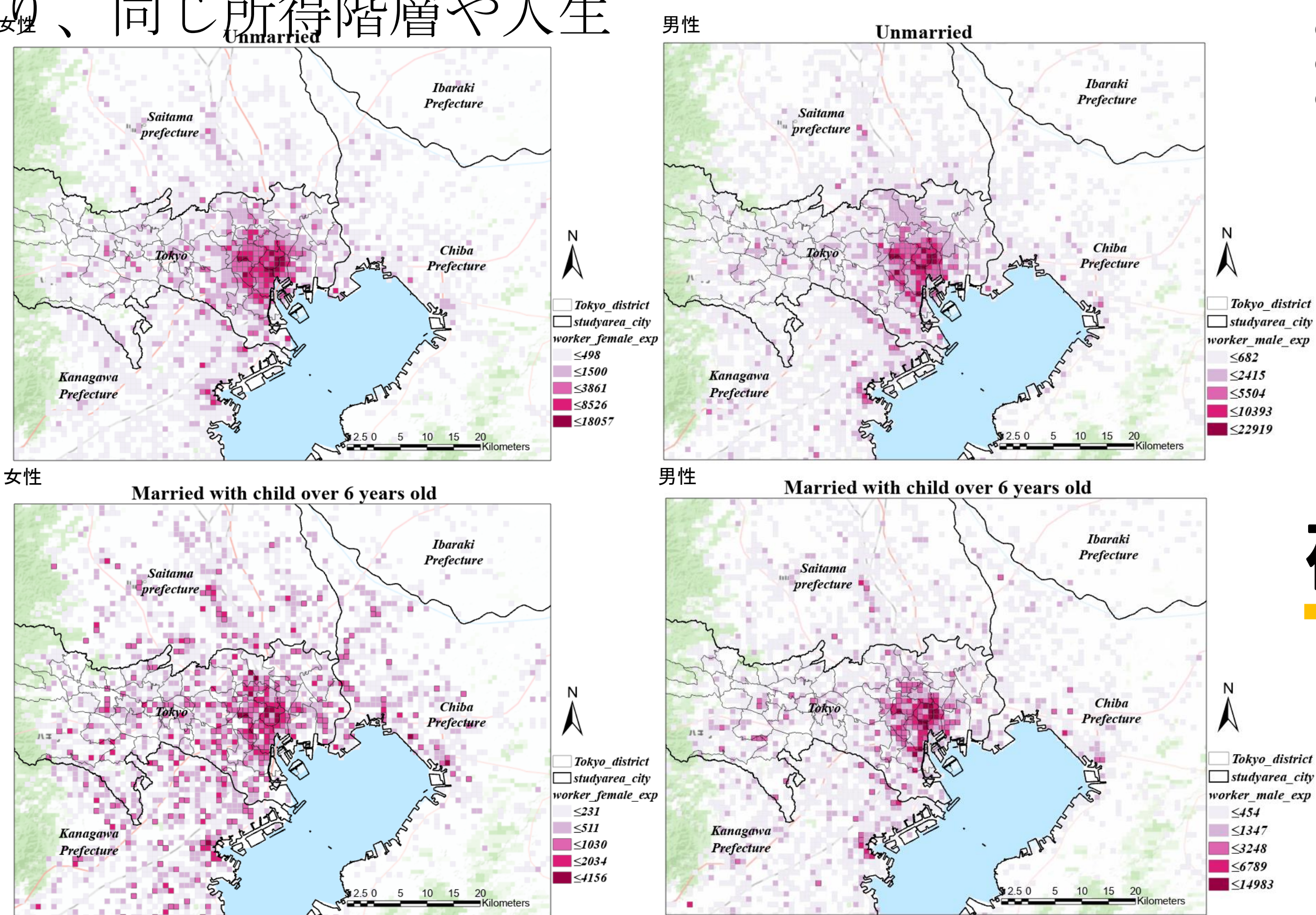


図3 男女の就業空間分布